

村上範致「安政丙辰聞見雜記 三」翻刻(1)

佐久間 永子 鵜飼 尚代

本稿は、幕末の田原藩士村上範致〔文化五年（一八〇八）―明治五年（一八七二）¹〕が記した「安政丙辰聞見雜記 三」（田原市博物館所蔵）全七十九丁²の内、一丁から二十八丁オモテの翻刻である。紙面の関係上、全丁の内、三分の一に相当する部分を掲載する。安政丙辰は安政三年（一八五六）にあたる。

まず、安政三年における範致の情況を見てみたい。二月に側用人仮役を命じられ、禄高は五俵加増、十俵足高、計四十五俵となる。のち江戸出府を命じられ、十一月には田原へ帰藩、十二月には大目付仮役を命じられている。³ 田原藩は、七月に「蝦夷地開拓願書」を箱館奉行竹内下野守へ差し出している。⁴ 江戸にあつて、和親条約締結後、米英仏露等外国勢力の脅威に混乱する社会を目の当たりにし、情報が入手しやすくなったことも手伝い、範致の郷土防衛意識が拡大していったのではないかと推測される。

記事としては、「安政乙卯聞見雜録二」同様、海外事情の写しが多々見られる。

『遐邇貫珍』には、世界各地で労働力として使われる中国人のこと、上海・廈門・福州の様子、外国人の生活、海外で

の出来事等さまざまな記事が見られる。『遐邇貫珍』は香港で出版された定期刊行物⁵であり、幕末の開明派の人々から極めて関心を持たれていた重要な情報源⁶であった。

また、『海国図誌』も欧米列強の東洋経略に危機感を抱く知識人に広く読まれた⁷とされている。

「鬼神論」は「鬼神」とは何かに始まり、論は仏教批判へと展開する。著者は、江戸時代後期の儒学者安井息軒⁸である。

「口宮遺聞」は、下総上津村の村正宗吾の生きざま、佐倉侯堀田正信の対応と後悔から宗吾を口宮大明神と称して祀ったという内容である。のち、宗吾は義民佐倉惣五郎⁹として知られることとなった。¹⁰

蝦夷地関連の記事は、松前侯の記事も含め、三件あるが、先に述べた蝦夷地の開発につながると見られる。

「伊豆七島」の記事は、各島の位置、大きさ、人口、耕地面積、特産品、山川、神社、仏閣が記されている。

長崎から帰藩した坂倉銀之助¹¹の咄しによって、長崎の様子、長崎で聞き得た英露の戦争（クリミア戦争）、清国の様子が記され、触書によって、伊達遠江守および松平出羽守製造の異国形船の様子を書きとめている。

以上、異国事情、軍備、蝦夷地開拓など、情報収集に余念のない範致の様子がうかがえるのである。

本稿に掲載する翻刻は、「村上範致古記録研究会」における輪読作業¹²の成果である。なお、内容を整理する意味で、内容ごとに通し番号（各冊子ごとの通し番号）を付し、内容紹介にあたる標題もそれぞれに付した。標題はまとめて翻刻の前に置く。この標題は、さきの「目次項目案」¹³を再考し改訂したものである。

「安政内辰聞見雜記 三」標題一覽（二十八丁オモテまで）

- ① 『遐邇貫珍』抜粹（近日雜報）
- ② 安井忠平「鬼神論」
- ③ 安井忠平「鬼神論 下」
- ④ 読海国図志
- ⑤ 蝦夷地開墾之事
- ⑥ 昨冬松前侯の領地安堵石高増加
- ⑦ 昨卯年、長崎市中の変化の様子
- ⑧ 下田港に暗礁を示す印建つ
- ⑨ 三州鳳来寺の山中に狒狒出没
- ⑩ 太田魯三郎の地震発生のしくみ説
- ⑪ 伊豆七島
- 1 大島について
- 2 利島について
- 3 新島について
- 4 神津島について
- 5 三宅島について
- 6 御倉島について

7 八丈島について

8 小島について

9 青島について

⑫ 浦御触書の写（伊達遠江守製造異国形の伝馬船に関して）

⑬ 浦御触書の写（松平出羽守製造異国形の船に関して）

⑭ 英・魯の戦争で英敗れ和睦成らず

⑮ 賊将朱子和睦

⑯ 昨年長崎港来航の南亞墨利加船提出の願書騒動

⑰ 長崎に諸薬製薬場出来

⑱ 口宮遺聞

⑲ 田原藩医伊藤讓謹上言於箱館鎮台執事

【凡 例】

一、資料には丁数が付されていない。各頁下方の丁数は便宜的に付したもので、丁の第一行目の下に置いた。

一、字配り等、原本の体裁を尊重するようつとめた。

ただし、内容ごとに一行間隔をあげ、通し番号を付した。通し番号は標題に対応する。

変則的に置かれた文字等は適宜読みやすい形にした。

一、文字の表記については、左記に従うこととする。

(1) 漢字は原則として常用漢字を用い、異体字は本字にした。

ただし、「フ」は「コト」、「尸」は「トモ」、「メ」は「シテ」、「井」は「井」とし、「斗」は「熨斗」「ばかり」のみに使用した。

(2) 固有名詞（地名・人名等）も、常用漢字を用いた。ただし「嶽」はそのまま使用した。

(3) 変体仮名は、原則としてひらがなにした。

ただし、助詞の「者（は）」「江（え）」「エ」「へ」「而（て）」「ニ」および「并」「而已」は、そのまま用い、ポイントをさげ右寄せにした。

(4) 繰り返し記号は、漢字は「々」、ひらがなは「ゝ」「ゞ」、かたかなは「ゝ」「ゞ」にした。二文字以上の場合には、「くく」にした。

(5) 「大夫」と「太夫」は、武士の場合は「大夫」とした。

一、漢文の読点、返り点、熟語であることを示す縦棒は原文のとおり表記した。読点、返り点、縦棒の朱書きの部分は太字とした。

一、あきらかに誤字、脱字とおもわれる箇所については改めることを控え、右側に（衍^カ）、（脱^カ）、推定できない場合は（ママ）、推定できる場合は（○^カ）と記した。

一、原本に掲載されている傍点、傍線は原則原本のとおり表記した。朱線は、太線で記した。

一、虫損、破損、などで判読不能の場合は、一文字なら□、文字数が不明なら□□で示した。

一、朱書きは、「」で囲みゴシック体にした。

一、修正を意図した塗抹の部分は、原則として翻刻に加えず、修正にしたがつて翻刻した。

一、地図は、原本のまま掲載した。



「安政丙辰聞見雜記 三」
の表紙(上)と本文(下)
田原市博物館所蔵

①

○遐邇貫珍拔萃

一千八百五十三年十二月朔旦 第伍号
香港中環英英華書院印送

近日雜報

十一月十四日、有^{アメリカ}花旗国船二隻^{カボホルヤ}、由^{金山}抵^レ港載回^二中土人

五百六十一名^一、有^二下携^二帶資財^一返^レ里者、暫反^二鄉井^一度^レ歲仍

回^三前往^二金山^一者^上、另有^二別国船^一、由^レ彼抵^レ港、載有^二中土多人^一、從^二

息力葛刺^二巴亜^一十^一低^一里^二垂^一三^一地^一回者亦不^レ少、其由^二息力葛^一

刺^二巴^一者、係自^二昔年^一以來貿遷生聚於斯實繁有徒而

前赴^二加爾各得孟^一買^二兩地^一者亦有^レ之、惟金^一山及^二垂^一十^一低

里^一亞、均為^二產^レ金之地^一、離^二鄉井^一而越^レ境至^レ彼者、乃出^二於近

年^一、但事雖^レ起^二於近年^一而人數至^二盈万累億之多^一、越^レ境之

1丁

人将来日見_二其增_一、因各处皆需_二營建工作_一而人力尚欠、種
 田砌路築室造舟其費不_レ貲、皆已其備、但乏_二人力操作_一而
 已現徐_二各國馳駛往來之道_一、皆臻_二便捷_一、傭工者恒如_二貨物_一
 流輻_レ利是趨、自_レ茲不_レ遠、余思中土人多有_下遷赴_二花旗_一
 國南境及西_一印度海島_一種_中植棉花甘蔗加非等物_上、況現值
 南北亞_一美_一理_一駕地其居_レ中咽喉如_二荖処_一、名_二巴拿馬_一、需_下鑄_二
 造火輪車路_一及開_二挑運河_一以連接_二太平洋_一西洋_一兩海_一免_レ似_二從
 前往返紆迴_一、故興_二此大工_一需_レ人尤多、亞_一士_一低_一里_一亞地因_三近時
 探_二出金礦_一、衆民多詣探_レ金致_二各牧場內工作稀少_一、新_一西_一
 蘭之地俱然、想能坐致_三中土人趨而補_二助之_一也、畢竟寔
 瀛四境、無中土人似此兆億儕流越_レ境与_三別邦人士_一往
 來接洽不得不於中土情形風氣稍有_二變化_一自愛而至_二
 於美_一者可_レ無_二他虞_一耳、越_レ境之拳不_二独中土人為_レ然、西土
 各古國人工繁集、工価賤減、人數逾溢、每年皆有同此
 長川外出以競趨維新之國地未開闢人工稀疎工価昂貴
 者以為_二謀_レ生之区_一、設以_二英國一土_一論_レ之、往年每月出_レ境人
 數核計竟与_二一大城邑之數_一同、辛亥年內計有_三三十三万五千
 九百六十六人_一、壬子年內計有_三三十六万八千七百六十四人_一、若按
 月計_レ之即三万〇七百三十人也、其年中出_レ境至_二花旗_一國_一者、二

十四萬四千二百六十一人、至「花旗」國北境之加「拿打」者、三萬二千八百七十五人、至「亞士低里」者、八萬七千八百八十一人、其至「各零星」別地」者、三千七百四十九人而已、惟西邦人出行者與「中土

人登」程迥不「相同」、西邦人俱挈「眷」而行、中土人多孑身遺家言邁

於理既屬不宜於事更形不便、推「原其故」、因「中國婦女例不」能任「便

外出隨」意聘游、在「別國」則不「然」、即閩人處子雖「薦紳豪

富之家」、皆得「遊行自如」、亦從無「虞」相欺外侮之事、苟出「境經營

之人、有「眷屬」者儘可「偕同前往」、因船舶各有「艙室」位置區

別、恒如「常居」、若有少妻幼子輒棄置他適僅託諸不開痛癢

之人為之照「聽其欣戚歎愁」何居之忽乎、縱使年中或有

寄資而天涯路渺尺書沈浮能否安函抵家固難懸揣

或遇旅身抱「恙歟」工乏資則寄須更無從措弁、凡此皆能致「

妻孥困苦眷口饑寒」、茲以「吾濟意見」按「之、有」家室者斯携

「之偕行為」宜、如「此即或不幸旅人病殞」他鄉、眷屬尚有

所依藉設法終期自立猶於地置在「鄉井」一舉目無「援孤悽莫

「告也、其富貴鉅族者、預為貽「留厚資」、以安「頓家屬」、似「尚無

「礙、然亦不宜拋家別室久閱「歲時」、置「之度外」、且骨肉分處

睽離積久、必有「意外之參商」、英人遠適者、倘倉卒無「資、

携「眷則先投身是他徐「備值蓄積」、俟「有」余饒、即寄項

接眷、去歲英人出_レ境至_二花旗_一國、凡寄_レ資接_レ眷者、登_二諸郵藉_一

有數可按共計六百七十六萬九千余円、在_二西_一印_一度海島、現懸_二

招帖_一、広集_二僱工_一、其業主、皆樂_二入_一之携_レ眷同往_一、如_レ有_二眷口同赴_二

於彼_一者_上、則眷屬之船費、悉取_二給於其主_一、蓋抵_レ彼時凡操_レ業

皆可_二兩人同_レ力合作_一、即携至孩稚轉瞬長成、亦可_二勲_レ力任_レ勞、是

家室安康而工作日旺、即主人之事業、亦可_レ期_二其蒸蒸日上

而增_レ高豈不_レ美歟、

英_一國花旗_一國兩土人、游行遠適者、指不_レ勝_レ屈、恒有_二旅居寓館_一、使_二游

人客子有_二賓至如_レ歸之樂_一、近年建_二造旅寓數処_一皆極_二宏広_一、

茲述_二其尤著者_一、在_二花旗_一國鈕_二北_一西_一郡城海瀕寓館一所、實為_二炎

夏遊人憩息之区_一、廠室以招_レ涼、澄_レ波以暢_レ浴、其館樓疊_二建四層_一

其四角後有_二一層_一傑出、其巔前簷、寬三十丈、旁廡廊、長五

十丈、內院階墀欄_レ地為_レ園亭位置名花異卉紅翠繽紛中

構_二活機_一水景噴瀑激湍、永日神怡、臥房三千五百間、外復

有_二客次庁堂_一宴飲茶話、各有_二其区_一、尤極莊觀麗、每客每

日計費銀二元半、為_二寓值及餐膳之需_一、若_二酒醴_一若_二浣濯衣

裳_一、若_二童僕使命_一、費皆在_レ外、臥房內各設_二沿池壁上_一、

安置_二機_一、拔_レ塞放_レ泉、溫冷各隨_二其意_一、夜熱灯不_レ飯_レ焚_レ膏、悉

置_レ管收_二取煤烟氛氤之氣_一、長筒貫接需將即燃、光明如

屋、其氣水管、皆範鉛為筒、流貫四達、共長三百七十五里、主人所收寓資其數實鉅、蓋寓館內居人恒滿、按臥房之數計之每日可收八千七百五十円、各雜費不在此內、此殆可為天下至廣之旅寓也已、

九月初二日、土耳其國在新疆業爾羌之西投軍書與俄羅斯國約期交戰、茲

括繪小圖附於後、閱者可覽之了然、土國與地、西境半居於歐

羅巴、東境半居於亞細亞、有黑海木刺海、實處兩國之中、西境

居歐羅巴地者與俄羅斯國境、土壤交錯、實為比隣、有多惱

河、截然橫亘以分疆域、而土國都城名君士但丁、建立於斯、

近者起釁之由則因土國崇奉回教而俄羅斯主崇奉天

主教、土國境內民庶、間有奉天主教者、常希求俄國主即有宜

何加置待各教中人之處致函弁論惟其有所欲云何土國

主未能概允、於是俄主竟調遣大軍命將統之、遙越多惱

河界、駐札於土國西境內、以示示威、抑強命使從而英吉利蘭

西俄斯之里亞等國、為之調停勸導俾免兵端、拘向土國告

以若何弁理可冀、俄主允議息爭、而土主亦弗克相從、亦遂

大興軍旅、意欲逐俄軍出境、第土國力微勢緩、似較小

弱、俄國氣焰雄、武、士馬精強、倘終無英仏諸國協力勦助土

國必為所克、現英仏二國已派調師船二大幫每幫數十舟、旋泊土

境内相機追止惟刻下尚未悉統師者其意如何容俟後
報方得耗也



《5丁オモテの地図》

月内有「上海來信」云、該處城地尚未_レ收、復本月初七日、有各路官兵
進攻、先期「吳道台」、曾有「照會」、駐上海各國領事官內稱擬於
某日攻城交仗恐斯時良歹不分紛々殺戮諸將各國官商署
行所用之司事中土人等姓名貫歷錄造冊籍移交備查俾

是日交仗俘獲人衆內有確係署行人役等供出姓名與冊相符

即行「釈放」云々、英領事官未允照行及過期始有交兵亦殊未分

勝負、惟東門一帶民房舖戶遭「焚燬者」、二千余間、損「耗資財

器物」、貨項數以「鉅萬」計、且使「億庶商民蕩折流離喪_レ家失_レ業、

慘罹浩劫至三城中人日用飲食一、固未嘗欠乏一、蓋城外蓬為市貨
 売交城中人即群立女牆上、緹監貿易接濟不置、

仙蘭西公使、九月三十日由上海乘火輪船一週江抵江寧、前篇曾

叙北路兵信已抵蘄城茲上海有閏十月十五六邸抄內雖有勝

保屢次馳報迭得勝仗多有剿獲等奏而敵人依然漸次北行、

竟抵楊柳青都流等處、且近有山東海船一抵上海、其來信則云、

十月廿七日、天津府已遭失陷、守土文武已多逃逸勢如互解矣、

廈門現現安堵、本月十五日、中国官吏已復設稅廠開征、各国

商船課稅、

福州地方安靖、茶葉貿易盛旺異常、各国商船多至彼交易、

易且有預定來歲之茶者、近得一信、福州城內地方官出示

准身家殷實人設立公茶行一所、承光給茶商、

寧波府前滋事匪徒近復蠢動、城內居民紛紛遷徙、官憲崇嚴

禁並捕匪十九人、正法、地方賴以安康、

英十月初十日、花旗國博斯頓城、有新製至鉅商船、是日竣工落

水、其船長二十二丈、闊五丈二尺、深三丈、內艙上中下、分四層、可任載

十万余担、擬駛抵金山暨來本港攬載十日間、有英商船一

隻由廈門駛赴福州於二十三日在洋面、被盜匪劫掠旋經火輪

師船聞報馳赴、剿捕殲燬四十余船、而師船尚有三板小艇一

隻水手五名失落無踪現在水師軍門懸賞購訪有知該水

手等下落能報信或妥送就近英衛門者獲_二回水手一名_一賞_二

銀一百円_一、

前第四号篇内、曾叙本港地保各条例茲擬增改数語前云

勳弁人以二十四名為額茲改定為十二名、前云會議時同座者

以_三五人_一為_レ率、今改定為三人、又增_二一条_一曰、同坐會議之際、倘有_下

事出_三於可否兩岐_一者_上、弁人或左袒或右袒、各署_二名於紙_一隨視_二署

名多寡之数_一、以較_二定所_レ議、凡地保署名抵作勳弁人二名核計

前第一号篇内、会叙俄_一羅斯_一國師船、夏間由_レ港前赴_二日本國等處_一、

茲已於_二上月_一、返抵_二上海_一、拋云日本現遭_二大喪_一其國主殂逝、

北_一亞美理_一駕_レ地、北冰海一帶歷來英國派_レ船至_レ彼探_二覓新地_一、途徑

七年前会遣_レ衆駛_レ船北行、久無_二音耗_一、三四年間復再派_二数船_一

由_二東西兩洋_一遡_レ流北上、探_二訪前船消息_一、去後数歲信亦杳然

近接_二郵信_一云、已得東西兩洋船回耗具言兩路船隻已得相遇

会晤於北冰海、竟得_二其海道_一、七年前之船終無_レ耗、₍₂₎

前第四号篇内、曾叙金_一山地方有_二花旗國善士_一欲_レ創_二建_一大改需

銀一万八千員_一、聞已捐_二得万員_一、今中土人亦共捐_二銀二千員_一、

本港公使文大人秋間奏請_二解_レ任回_レ國、現已得_二旨准_一於_二來歲三月

間_一另簡派_二新公使_一來_レ港接_レ任、

7丁

港內下環燈籠洲地方舖氏聚落百十家於二日前一有匪數十

人一、於二夜四鼓時一明火鎗械毀門將一烟舖搜劫一空且鎗傷

巡役及街隣數人藐法兇頑、實為二十年未見之事一、

旧歲英國各港進口船貨有籍可校茲列於左一

- 一 本國進口船貨四百九十三萬四千八百六十三萬
- 一 別國進口船貨二百九十五萬二千五百八十四萬
- 一 本國出口船貨五百零五萬一千一百零六萬
- 一 別國出口船貨三百一十九萬一千五百九十六萬

每萬計
十七担零

②

鬼神論

飫肥儒臣安井忠平也

8丁

〔有下〕

有下轟然震於天者上、指而告人曰雷也、人從而信之、

○奮然躍於淵一者上、指而告人曰竜也、亦從而信之、以三

其有二三形与レ声耳、是故、風之蓬然而行也、号於万物

之竅一、氣之蒸々而升也、浮於朝陽之隙一、故有是物一

必有是名一、因レ名以求レ実、雖下變如雷竜一微如中風氣上、我

得而察レ之、其唯鬼神乎、視レ之而不レ見、聽レ之而不レ聞、

若三森然充於天地之間一、而莫三能得其狀一、則古者、何

以設是名一也、今夫遠夷無文之地、得レ疾而禱、遭レ災

而禳、天地有レ祭、山川有レ祀、非有於吾道一也、非人指

〔微疑微誤〕

教_レ之也、發_二於情_一而行_二於事_一、然後、其心安焉、橫目之民不_レ謀而同、是之謂_二鬼神之實_一也、何以言_レ之、途之人相遇_二於野_一、好惡動_二於彼_一、而順逆之氣、応_二於此_一、心之無_レ形、猶_二神之無_レ狀、目不_レ能見、耳不_レ能聞、而彼我已接_二於冥々之中_一、非_三唯以_二其有_レ物耶、鬼神之於_レ人、亦猶_レ此焉、爾、然則、聖人設_二鬼神之名_一、蓋得_二之人情_一也、人情天也、所_二以行_レ之者人也、人与_レ天合而道生、故、道也者、所_レ以達_二人情_一而坊_中其溢_上也、而於_二鬼神_一乎最慎_レ之、夫鬼神雖_レ無_二形声可_レ微焉、有_レ時成_レ狀、故聖人嘗於_二繫辭_一、而一_レ言_レ之、然亦有_レ正焉、有_レ夭焉、不_レ足_二以為_レ訓、而魂氣之所_レ動、人又以_二禍福災祥_一而視之、畏而敬、疑与_レ信半、其善易_レ導、其惑易_レ成、謂是可_二以設_レ教而適_レ善矣、而哀情所_レ根、其溢有_二不_レ可_レ不_レ坊者_一焉、於是為_二之主_一、凡廟壇以顯_二其位_一、薦_二之性慤黍稷_一、以明_二其享_一、拜跪以事_レ之、歌吹以樂_レ之、齊明盛服極、其誠敬、使_レ民能知_二其所_レ當_レ祀以達_中其情_上、而以_二左道_一惑_レ民者、殺_二其道_一、可_レ謂備且嚴矣、然猶恐_二其惑_一也、故詳_二其事於礼_一而略_二其理於辞_一、不_二敢質言_レ之、不得已而論_レ之、必

〔性疑性誤〕

9
丁

〔問疑問誤〕

曰如^①以狀之如^②云者、不^レ得^レ接^③其形与^④声之謂也、夫、其不^⑤得而接^⑥者、即其所^⑦以体^⑧物而不^⑨可^⑩遣也、聖人之精^⑪乎情^⑫如此、故神人以治、而民享^⑬其福^⑭矣、及^⑮至^⑯後世^⑰智慮淺短、專任^⑱耳目^⑲、不^⑳復求^㉑乎古人制礼之意^㉒、徒聞^㉓鬼神之名^㉔、而不見^㉕其形^㉖固已疑^㉗其無^㉘矣、然猶曰是聖人之言也、不^㉙敢顯然与^㉚之、倍必欲^㉛得^㉜其狀^㉝、而明言^㉞之、而精氣成^㉟物、游魂為^㊱變、亦不^㊲足^㊳伸^㊴其說^㊵、於是強求^㊶之理^㊷、見^㊸二氣所^㊹以往来^㊺、乃曰是鬼神也、見^㊻其榮枯盛衰於物^㊼、乃曰是其跡也、至^㊽以為鬼神成^㊾狀於心^㊿而極^㊿矣、而我理不^㊿足^㊿以勝^㊿彼情^㊿、語^㊿之益詳、聽^㊿之益邈、其民渙焉、日離、草鞋有^㊿神、野狐有^㊿靈、水石之怪、莫^㊿物不^㊿祀、傑者興^㊿其問^㊿、益張^㊿皇其說^㊿、以羅^㊿斯民^㊿、而王侯所^㊿以御^㊿下之權、削矣、故昏姻之礼、殺、而世多淫刑、享献饋問之儀、失、而賄賂公行、聖人以^㊿神道^㊿設^㊿教之意、微、而佞^㊿左道^㊿以惑^㊿民者、偏^㊿於天下^㊿、皆不^㊿知^㊿道原^㊿於情^㊿之過也、

鬼神論下

左道蠱_レ民之害、唯浮屠為_二最烈_一矣、

皇朝姑置焉、且六季而下、非_レ無_二英明之君_一、往々

為_レ其所_レ愚、眩_コ曜_レ其神_一、輪_コ興_レ其居_一、浚_二民之膏血_一、

以飽_二其徒_一、府庫乏_二於上_一、田圃荒_二於下_一、而方且名

之為_二功德_一、甚者、至_レ以亡_二其身國家_一而不_レ悔、或能

奮然撲_コ滅_レ之_一矣、而余燼復熾、甚_二於燎原_一、至_レ今千

五百年、豪傑之士、瞋_レ目撻_レ腕、思_三以闢_二其說_一、而竟

無_二能勝_レ之_一、此其故何也、安井衡曰、浮屠之說、巧

矣、君子服_二於理_一、小人忱_二於禍福_一、々々動_二於

情_一者也、理悅_二於心_一者也、故理易_レ闢、而禍福

難_レ解、世之欲_レ闢_レ之者、常密_二於君子_一、而忽_レ於

小人_一、其言難_レ切、独奈_下与_二民心_一不_レ相入_上何、而

或者、又取_二彼理_一、以解_二我道_一、因惡_下其言与_二我

書_一相類_上、而痛_二斥之_一、此其說既不_レ足_三以服_二浮

屠之心_一、況能得_二之蚩々之氓_一哉、夫浮屠之

言、顯与_二我道_一倍、無_三一有_二近似者_一、唯其禍福

死生之說、乃天下之同情、益我道一端而

誕妄不經、偶与_二蚩氓好_レ怪之心_一会、操_レ之有

術、導之有法、而賢人君子、又執其無魂之

11
丁

論以驅之、凝為一塊、牢不可破、是我過也、然則如何、曰、以彼闢彼、以情如此而已、人之立于世也、生於父、而食於君、恩莫大焉、而浮屠遺之二者、以為真実報恩、其罪固不容於誅、然此猶自我言之也、自我言之、可以教我民、而未足以服其徒、故我報其所為道以責之、彼入、無妻妾、彼之內也、出、無騶從、彼之外也、不敢飲酒食肉、彼之口也、捨衣而衣、乞飯而飯、彼之產也、樹下石上、三宿則去、彼之居也、果能此道矣、亦山林、独善者之所為、雖下頭与我道一倍、我亦何惡、然是數者、人情所甚難也、拳以律於彼、能不犯之者、其與幾人夫、倍其君父、又其遺所大禁、以独便其身、是我所謂國賊、而彼謂罪人也、然後、徐拳我法、加諸彼身、以及其盧、其徒雖衆、可立尽矣、然此猶策之委也、善治國家者、先治其源、々者、何也、情是已夫、禍福死生之際、人情所最怵也、聖人嘗備陳之矣、故積善之家、

〔卑恐卑誤〕

必有「余慶」、積不善之家、必有「余殃」、我之命禍福者也、彼以為「輪廻之說」、則誕而妄矣、神不「欽」非類、民不「祀」非族、祖孫一氣、有「感」必「応」、我之事「死者」也、彼以為「拔苦之術」、則陋而誣矣、卑焉而零、災焉而祓、天地山川戸雷之夥、无「不」有「主」、則亦無「不」有「祭」、我之奉「神」者也、彼一求「之」仏、推而求「之」心、則傲而悞矣、凡彼之所以「得」乎民、我皆有「之」、而高卑深淺、又且如「此」、捨而不「用」、用而不「誠」、使「誕妄傲悞之徒」敢弄「御」下之權、我不「知」其何說「也」、且浮屠雖「縱如」鳥獸、然其始亦「我」民也、入有「父兄」、出有「長上」、安能私「其身」哉、二法既施、又敷「我於不」能「私」其身「之時」、使「知」君父不「忍」倍、而浮屠不「足」樂、而嚴禁不「用」我法「者」、民之為「左道」所「蠱者」、蓋鮮、嗚呼、此聖人所「以」貴「於神道」也、

④

読海国図志

元氣磅礴、蕩「於」無垠、大地懸「於」中、旋轉以行

環焉、而国者、無慮數百千、大則瀛海隔之、小

則山川限之、而寒暑異候、肥瘠殊宜、民生其

間、言語衣食、習尚之、区以別、邈焉如異物、此

天之所以使斯民各遂其生也、聖人仰而奉

之、各帝一方、以育其民、凡与我異俗者、棄而

絕之、豈其仁有所不足哉、謂我仁吾民、彼愛其

民、普天之下、莫不蒙其沢、必欲推愛於殊俗、我

仁未暇以洽於彼、而我所愛者、先受其害、故棄

而不收、各全其天、是以徧地之民、皞々熙々、生

死於膏沢之中者、蓋數千年矣、世運漸降、好名

貪利之徒興焉、於是、南北相擊、東西相并、仇怨

所結、牽不_(レ)可_(レ)解、民之死於鋒鏑、動輒數十萬、慘

痛楚毒之狀、有不_(レ)可_(レ)勝言者焉、然其禍猶止三隣

近、未_(レ)有_(レ)踰瀛海_(二)渡絕嶮_(一)以盜_(二)人国_(一)者、其有_(レ)之、自

歐羅巴諸夷始矣、夫欧夷之於利、無遠不_(レ)至、堅

其艦、巨其礮、以周流地球、俗愚則誘而取之、勢

弱則攻而奪之、智不_(レ)能誘、力不_(レ)能攻、則詭譎百

端、以通互市、攫其財、奴其人、必盈壑谷之慾、而

止、而其尤甚者、欲統大地而帝之、而望人奉天

〔微疑懲〕

仁_レ民之道、荒矣、此亦天地之一大變矣哉、清国

魏源、懲_二阿片之乱_一、嘗著_二聖武紀_一、以潮_二富強之源_一、

又訳_二此書_一、増以_二聞見所_レ及_一、而四方之國、粗無_レ遁

形、其於_二内治外攘_一、可_レ謂_レ尽_レ心矣、夫聖人之道、至

矣、物莫_二以尚_一焉、然狡焉思_レ闢_レ國者、極_二其智巧_一、以

窺_レ我、我示_レ不_レ得_レ不_レ悉_二其情勢_一以備_レ之、則若_二此書_一

者、雖_二聖人復興_一、其心有_レ所_レ取焉、嗚呼物無_二常盛_一、

富強之勢、一彼一此、而各欲_レ求_二其所_レ利而有之_一、天

下之乱、寧有_レ窮已乎哉、誰与創_二此禍_一者視天

夢々、若_レ不_二人克_一、悲夫、

14
丁

⑤

一

蝦夷地開墾之事人民百人も党し遣し

候得_者地面八里四方も御渡しに可相成之由

至而大略にて何れの山方何れの川迄抔と

大凡の積ヲ以御差図_二相成候由也南蝦夷地

_{二而}箱館の裏_二当りてヌーヤとか言ふ所至_而

宜敷地なりと聞けり _{予是事を聞蝦夷地図を出し}

_{見るに箱館の裏ヌーヤといふ}
所ハ見へす候得共海湾の様子
如何にも可然所ならんと思はる

15
丁

⑥

一

昨冬松前侯奥州白川郡^{ニ而}壹万石出羽村山郡

にて式万石御拝領松前之御城地ハ其儘被下^ニ相成

候由

^{昇滝子説^{ニ者}其臣蠣崎某昨年中書面ヲ以}

松前城地ハ御引上ケ御用捨之段強^前願上之候^ニ付御聞届

^{ニ者}相成表向^者御加増なれ共内実^者甚御難決^ニ可有之
全御科代なるべしなからく噂あり

⑦

一

昨卯年十二月出長崎方之書状中当時ハ先年と違ひ

蘭人も市中勝手次第^ニ徘徊致候様相成且当所稻

佐と申所^ヘエケレス上陸の館出来致し其外細

事変革の事許多有之候

⑧

〇

豆州下田港^ニ海中^ヘ昨年方^ニ二ヶ所^ヘ印を建候由右

^{者是迄}皇国之回船此辺^ニ船懸りせしが一昨年メリケ

船来りて此辺^ニ船を寄するは甚だ危き事なり彼是

^{ニ者}暗礁二ヶ所ありと示しける故審^ニ測り見るに果し

て暗礁ありけれハ其後此所^ニ印を建たりとぞ江戸

廻しの瓦積船右印を見来りての噂なり

⑨

〇

三州鳳来寺の山中^ニ大なる狒々^{ヒ、}住めりと昨年椎

茸のもの山中^ヘ入りし^ニ向の岩に腰をかけ股の虱

を取り居れり毛色ハ瓦毛^{ニ而}頭髮肩まで垂れて
禿髪の如く腕より臂の毛長き事五六寸もあるべし丈
ケハ並の人類^ヲ少し低き位眼ハ光りて見ゆる見出したる
男恐怖して帰宅衆人へ咄しけるが昔より年古り
たる大猿を狒々といふ事ハ聞たる右様のもの有る事
なかるべしとて信ぜざる処其後又樵夫兩人此山中^{ニ而}
溪を隔て睨と見たりとて咄したれハ先の男の物語も実
説なりとて滝川氏^予語れり

⑩ ○

太田魯三郎地震前見之説近頃地震数

多有之故之ヲ諸書^{ニ考}地震者エレキテルノ

氣地下ニ充滿シテ鉄氣空中地上ニアルモノヲ吸引ス

ル故^ニ振フ也其証ハ平日磁石ヲ懸ケ是ニ鉄釘ヲ

吸ハシメテ垂レ置クニ地震ナラントスル前日ニハ磁石

鉄ヲ吸コト不克鉄釘石ヲ離レテ下ニ墜ツ是地下ノ「エレ

キテル」鉄ヲ吸引スル也以是試ルニ果シテ驗アリシテ云エリ

⑪

伊豆七島

⑪ ー 1

□ 大島 伊豆^ニ属ス 江戸ヨリ海上四十六里 周廻十二里東西二里

17
丁

半余南北五里 ○戸六百卅九 ○口三千四百五十 ○村六田

畝百廿一町三反一畝八分 ○物産 薪 ホウノ木 鰹節 塩漬魚類

鰻 鮭 鮑 海老 鯛 シマサヨリ 海苔 鶏冠草 椿ノ油 凝海藻

○神社 三原山大明神 吉岡大明神 神達大明神 吉谷大明神 二ノ明神

秋野大明神 老姥大明神 以上新島村 大官大明神 塩竈大明神 以上野増村

大六天神 蔵王大権現 波志加麻大明神 以上泉津村 八幡宮 為朝ノ勸請スル所ト云フ岡田村

春日大明神 差木地村

竜神社 波浮姫大明神 以上波浮湊

○仏閣 医王山金光寺 曹洞伊豆綱代修禪寺末岡田村 延命山潮音寺浄土宗

下田村 海禪寺末 新島村 栄昌山海中寺 日蓮宗下田本覺寺末 薬師堂 以上新島村

○山川 三原山 風拝山 荒島山 神達山 地岡山 櫛ヶ峰 天神原 以上新島村

北野原 千賀崎 以上差木地村 新築出浜 蛇山 押出岩 以上野増村 行者窟

泉川 御朱印川 以上岡田村

○利島、新島ニ属ス 江戸ヨリ海上四十八里 周廻二里余東西廿六町

南北十八町余 ○戸六十四 ○口二百八十八 ○田畝七十五反四畝廿四分 ○

物産 鰹節 椿油 海苔 石花菜 羊栖菜 黄絹 黄木綿

○神社 正一位預大明神 正一位三島大島大明神 下上大明神

若宮八幡宮

○

仏閣 妙昌山長久寺

日蓮宗下田本覺寺末

観音堂

薬師堂

此島ハ平衍
ニシテ記スヘキ

山川ナシ島中
蚊□出セス

⑪
— 3

□

新島

伊豆ニ属ス 江戸ヨリ海上五十一里余

周廻七里東西卅町南北

三里余 ○戸三百八十三 ○口二千二百廿八 ○人九十八 ○村二

○田畝四十九町三反七畝六分 ○物産 薪 乾魚類 拳螺 鲍魚

サンマ 竹筴魚 イタラ貝 鯉節 椿油 椎実 椎茸 雞冠草 海苔

凝海藻

神社 正一位十三社大明神 三島明神ヲ正殿トシ島中ノ十二神ナリ

□□大三大明神 早島大明神 富藏根大明神 淡井姫大明神

鵜殿根大明 鉈折大明神 泊御口太后大明神 以上本村 八幡宮 稻荷社

山神社 為朝大明神 以上若郷村

仏閣 三松山長栄寺 日蓮宗下総中山法花経寺末塔中ニ善立坊 正覚坊 常円坊

若郷山妙連寺 長栄寺末東陽坊旧式根島ニアリシヲ寛政中ニ妙蓮寺ヘヒク

●

山川 宮塚山、新島峰、水尻泉 島分山 烏帽子形岩 大三山 丸崎 地内嶼

御蔵沢 淡井浦 舗根洞 以上若郷村

⑪
— 4

□

神津島 伊豆ニ属ス 江戸ヨリ海上五十六里

周廻五里東西一里十町余南北

二里余 ○戸二百七十二 ○口千六百卅二 ○■人十三 ○村三 ○田畝二十一町七

反七畝廿一分 ○物産 鯉節 乾魚類 凝海藻 椎実 椎茸 鶏冠草

黄紬 黄絹 黄木綿

● 神社 正一位津島大明神 中村 阿波社 日向大明神 多子浜村 長浜大明神 長浜村

● 仏閣 延命山濤響寺 浄土下田海禪寺末 滝川観音堂 以上中村

● 山川 天城山 黒島山 多子登山 以上中村 長根山 秩父山 滝川

長浜川 白砂川 以上長浜村 利島川 多子川 以上多子村

⑪ 5

□ 三宅島 伊豆属ス 江戸ヨリ海上六十里 周廻八里余南北四里余 ○

戸四百卅八 ○口二千三百十三 ○■人百廿五 ○村五 ○田畝百十七丁

七畝七分 ○物産 薪竹 鯉節 椎実 椎茸 木茸 凝海藻

鶏冠花 黄絹 黄太織 黄木綿 生絹

● 神社 富賀大明神 御笏大明神 以上神賀村 后大明神 伊ヶ谷村 八幡宮ノ姉宮

以上伊豆村 差手大明神 保取明神 以上阿古村 御嶽神社 長根八幡宮

● 為朝大明神 城山為朝ノ旧跡 坪田村

● 仏閣 高根山大林寺 下田海禪寺末 荣昌山妙楽寺 大林寺末 以上神賀村

普西庵 同寺末 伊豆村 坪田山海蔵寺 同寺末 善陽寺 新島長栄寺末 以上坪田村

円徳寺 同寺末 阿古村

19丁

⑪
— 6

□

●

山川 大露山 八重洞 棗棠沢 島中平衍ニシテ山川少シ牛馬ヲ産スル殊多シ蚊ノ類一切ナシ蜥蜴多シ

御倉島 一御蔵作ル 三宅島属ス 江戸ヨリ海上六十六里

周廻四里東西一里余南北一里八町 ○戸二十八 ○口二百卅六

○田畝五町一反六畝十三分 ○物産 黄楊木 柯樹子 椎実

椎茸 薪 木茸 乾菜

●

神社 正一位富岡東国大明神 鑑取大明神 兵部神社

壬生神社 御笏大明神 今神子社 兄目社 山王 若御子大明神

劍神社 島分神社 若宮八幡宮 二宮 岐宮 諏訪明神 御嶽社

神取明神 子安明神 稲宮 御最前神 渡明神 福德明神 山神社

氏茂大明神 布袋神社 入道神社

●

仏閣 万蔵寺 浄土 三宅大林寺末 薬師如来

●

山川 一森 二森 三森 大川山 大抵山 島分山 川口山

丹泥山 素良川滝 白滝 平清水滝 此島牛馬ナク蛇鼠蛇甚多シ

⑪
— 7

□

八丈島 伊豆属ス 江戸ヨリ海上百廿里余 周廻十五里余東西

三里余南北七里十町 ○戸九百六十八 ○口八千六百五十八 ○

村五 ○■人男二百五十九 女廿三 ○田畝三百六十一町五反五畝十

六分半 ○物産 八丈織 黄紬 黄絹 八緞太織 黄木綿 生絹

木茸 黒菜 羊栖菜 鹿角菜 乾柔魚 乾石決明 乾鯛

20
丁

● 神社 正一位 宝大明神 優婆大明神 太神宮 天満宮 三島明神 源明神 八幡宮

石賜宮 関貫明神 御嶽社 御膳明神 渡明神 以上三根村

太神宮 八幡宮 根内明神 石賜宮 三島明神 諏訪明神

以上末吉村 太神宮 淡島明神 八郎明神 石賜宮 諏訪明神

風宮 三カ 二島明神 以上中ノ郷村 波宮 伊賀明神 八幡宮

風宮 以上檜立村 永郷神社 麻巳明神 為朝ノ姿 以上大賀村

○ 仏閣 海雲山長樂寺 禪宗起立モ詳ナラス正平二十一年八月和州広瀬一楽寺地蔵院観快ノ弟子祐賢ナル者ノ端書ノ文書ヲ藏ス

香炉山宗福寺 浄土宗下田海禪寺末 以上皆三根村 二ヶ寺共肉食妻対ナリ

○ 山川 横尾峰 大久保山 河立山 三原山 富士山 泉山 外竜原

六日原 横磨原 千代川 大黒川 河舟川 二水 以上大賀村 加茂郷

南沢 以上三根村 瀬戸川 社川 鳩井川 以上末吉村 安川

樺川 堤沢 以上中ノ郷村 三原池 積田川 樋川 椎津川 砥折川

マヅ 砥折川 手名川 三原白竜 以上檜立村

□ 小島 八丈島ニ属ス 周廻二里東西十六町南北九町余 ○戸五十六 ○

口五百七十六 ○田畝高未定 ○物産 黄紬 黄絹 黄木綿 鯉節 乾魚類 竹
細工籠 興糸蒔

○ 神社 正一位為朝大明神 八丈青島及當島ノ總鎮守トス 富貴大明神

○ 鑄物師大明神

○ 仏閣 青島清受寺ノ出張有ノミ

○ 山川 記スヘキ者ナシ近時小島中ニ村名アリ宇津木村島打村
ト云フ然レトモ私称ナレハ記セス

⑪
— 9

□ 青島 八丈島ニ属ス 昔ノ鬼ヶ島是也 周廻三里東西廿町

南北十二町余 ○戸卅八 ○口百八十八 ○田畝高未定 ○物産 黄紬

黄木綿 鯉節 乾物類

○ 神社 太神宮 魃鬼大明神 大川戸大明神 小池大明神

赤羽大明神 風宮祠

○ 仏閣 海音山清受寺 浄土宗八丈宗福寺末 弁財天祠

○ 山川 陰陽岩 小池川

右諸書参考シ大概ヲ挙ノミ然ルニ諸書尽ク異同多シ其両可ニシテ
知ルベカラザル者ハ大抵南島雜志ニ從フ者ハ其書近年ニ成ヲ

以テノ故也享保己酉ノ歲ニ八丈島ノ戸數六百廿九口數

五千七百七十文政己丑ニ至テ百一年ニシテ戸ノ益スコト三百卅

九口ノ益コト二千八百八十是ニ由テ之ヲ觀レハ八丈島ノ如ハ

誠ニ彈丸黑痣之地ニシテスラ戸口ノ繁茂スルコト此ノ如シ況ンヤ

内地ノ広大ナルニ於テヲヤ天地造化生々シテ息マズ人其間ニ在テ耕テ食ヒ織テ衣ル事ヲ思ヒ遊惰偷活ノ道ニ非ルコトヲ知バ何ノ地ニテ生營ノ事無ハナシ七島ノ居民自ラ粗食弊衣ヲ常トシ男女共ニ少シモ佳物ハ家ニ儲フコトナク内地ヘ運漕シテ世業トス其艱苦ノ程想像スベシ而シテ都邑沃土ノ人ニ百年來太平ノ恩德ニ浴スルヲ省スシテ反テ驕奢供欲ヲ事トシ是等ノ事ヲ知者ナシ噫人トシテ誰カ飽煖安富ヲ欲セサラン不幸ニシテ若シ幽裔僻地ニ産シ修身役々トシテ他顧スルニ遑アラズシ糟糠ニモ厭ザルニ憐愍スベキノ甚キ者ナリ全此図ヲ製シ七島ノ形勢幅員ヲ言ノミニ非ス世ノ膏粱ノ子弟ヲ醒警センコトヲ欲ス故併ニ記ス

22丁

⑫

○

浦御触書之写

一 伊達遠江守製造異国形之真風伝馬船檣二本遣り出し

共黒横筋段々之帆印舳の方ニ白地日之丸之小

幟^幟方ニ白地朱九曜之小幟立伊予国宇和島

方諸国通船致し候条其旨相心得湊掛等之節

^者定例廻船之通り取計ひ別紙案文之通請書

相添刻附を以早々相廻し触留方最寄御代官

江相達此触書御勘定所へ可相返者也

辰二月廿九日

無御座

因幡

筑後御印

左衛門御印

加賀御印

河内御印

武藏品川方相模伊豆駿河遠海三河尾張 右海岸村々庄屋組頭

⑬

同 写

一 松平出羽守製造異国形之船檣式本式段帆遣り出し共

白地紺子持筋之帆印艦之方に日の丸之小幟立出雲

国方江戸迄通船致し候条其旨相心得湊掛り等之節

者定例廻船之通取計別紙案文之通り請書相添

刻付ヲ以早々相廻し触留方最寄御代官へ相達可

申者也

辰二月十七日

因幡御印

筑後御印

加賀御印

河内御印

武藏品川方

——— 村々庄屋組頭前文之通り

⑭

○

四月十八日坂倉銀之介長崎方着_{ニ而}咄_ニ長崎稲佐と申処へ
昨年方英吉利応対之館出来_{ニ而}昨冬_ニも英吉利船来

23
丁

船可致之処、向三年前、方魯西亜と闘争^ニ及ひ、昨年魯西

亜、国東隅セ、パステカルと申、処^ハ英船数多襲来候、処魯西亜

之海港、嚴備^{ニ而}立錐の地も無之、大砲備有之、其上港口^ニは巨大

の鉄鎖ヲ張り、英船何様勇進すれ共、近寄事不能、不得止

裏手^ハ廻り上陸して戦候、処魯西軍偽敗して、寒地陰阻^ハ

誘ひ悉^ニ英軍を打敗り、英軍之敗亡^ニ乘して大勝利を

得たり、依之英夷、方和ヲ談候、処一切聞入不申候^ニ付、欧羅巴洲

全国申談戦争^ニ可及旨申遣候、処魯西方^{ニ而}ハ最可至

如斯時ハ、全国不殘打取るべしとの對へなりとぞ、魯西亜

軍ハ何十万^{ニ而}も敗傷等有之、時ハ即^ニ前条人数丈、新手ヲ

入レ換へ、闘戦して更^ニ困阨の勢ひ無之、由○又噂^{ニ者}和蘭ト

英吉と戦争始りしと聞けり、致案事^ニ前文の如く英夷会主

和蘭^者魯西亜と近親之国なれハ、不同心なるべし、
懸る時ハ英夷怒^ニ和蘭と戦争ヲ起せしなるべし

⑮ 清国^者、当節平穩なるよし、賊將朱子も和睦^ニなりしよし也

⑯ 一 昨年長崎港^ハ南亜墨利加船来り、沖^ニ船懸りし、パッテイヲ

を以て乗込大波戸^ハ上陸致し、何ヶ書面ヲ以願書差出候、処通

詞一切不相分其書ヲ蘭館カビタンへ差出しカビタン蘭字ニ認（コト）訳

し又通詞和解して御奉行所へ差上候へ共何様の事哉其事柄

ハ一切世上へ洩り聞へず候由
右バツテラを肥筑千人番所之者点査且
註進モ無之長崎港へ為乗入候付不念相成
右両番所之館長自殺致候由

⑰

一

当節長崎小島村辺田圃へ諸藥制煉之場出来長崎へ出張
之蘭医此処ニテ製煉致候由

⑱

□宮遺聞

謙安 藤井静有定著

阪東ハ山水鬱勃之地、其俗遺俠、一朝忿恚以自忘者比比皆是、

惟其首レ事処レ難周詳悉備、能成ニ其志一如ニ吾宋吾一者未ニ之見一也、宗

吾下総河津村人、或云其先出ニ於平将門一、或云昔有ニ皇女玉媛一、

嬰ニ惡疾一見レ放、其臣某氏、看護之レ東、来ニ下総一居ニ土浮村一、無レ幾

媛没、其乃為レ民以終、宗吾即其裔也、未レ知ニ熟是一、宗吾幼而

有レ才、為ニ人所レ愛、及レ長為ニ村正一、寛永末、佐倉候堀田氏加賀守卒、

世子上野亮襲レ封、政道漸弛、租役無レ度、民離散者百余人、僧院正盛

十一為レ之荒蕪、河津亦封内、宗吾及隣里諸長、訴ニ之佐倉一、弗

レ報、正保元年十一月闔郷會議、將レ訴ニ於江戸邸一、宗吾謂レ衆

曰、今且弗_レ報、訴_二之都邸_一、亦必無_レ益、則所_レ賴者有_二大府聽
 斷_一耳、子等以為_二何如_一、衆曰事苟有_レ成乎惟与_レ子共之、於_レ是即
 夜戒裝、或取_二路市川_一、或由_二行德_一前後相發、凡五十七人、二日達_二江
 戸_一、逆旅既定、独宗吾称_レ疾不_レ至、衆先作_二書一通_一、詣_二堀田氏之
 邸_一、踵_レ門訴_レ之、吏以下_レ不_レ埃_二命佐倉_一、径犯_二都邸_一、事失_中次序_上、却而
 不_レ顧、衆漠然、無取向以為_レ宜_二邀_二宗五_一然後謀_レ事乃使_二六郎
 滝沢_一重右_下勝田_{村正}往促_二宗吾_一、二人遇_二諸船橋_一、携至_二于逆旅_一、
 衆告以_レ故、且問_二為_レ之如何_一、宗吾曰、果如_二吾言_一、請訴_二大府_一、
 顧我儕小人効訴非_レ宜、罪豈可_レ免乎、使_二衆徒死_一無_レ益也、晋
 六郎重右半十_下小野_{村正}三郎_{高田}忠藏_{千葉}等五人使_二其
 同盟五十二人各歸_レ鄉就_レ耕、而与_二五人者_一謀、瞰_二閣老久世氏
 大和守_一之朝_二大城_一、就_レ輿奏訴亦弗_レ報、時已十二月
 大猷君将_レ拜_二東叡_一祖廟_一、宗吾躍然起曰可矣、遂辞_二
 六郎重右等_一、独至_二于上野三橋_一、就_二東橋下_一、伏_二水中_一而待焉、預
 封_二書油紙_一、置_二于懷中_一、以_レ席自掩、水流_二其上_一人無_レ識者_一、久之
 叱喝截_レ道、儀衛整齊、大駕方抵_二中橋_一、宗吾乃從_レ中起、衣裳淋
 漓匍匐以前、左右異_レ之搏而倒者數、白曰直訴々々左右収
 書致_レ之 駕前、宗吾即退、是日大府命遣_二參政井上氏_一
 河内守_{正利}返_二書於堀田氏_一、緘識如_レ故、堀田氏乃乞_二宗吾於

大府^一、与^二六郎等五人^一、檻^三送佐倉^一繫^二之獄^一、既而誅^三宗吾於江
原台^一、逐^二五人于江戸及佐倉方十里之外^一、初宗吾聚^二某女^一

曰^レ參、同^レ夫処^レ磔、有^二子四人^一、曰宗平、曰源助、曰喜八、曰^三之助、皆

被^レ斬、其就^レ刑也諸吏成^レ列、宣^三罪狀^一、威儀肅然、宗吾与

^レ參、方縛^二磔柱^一、宗平等四人亦縲繼登^レ場、劊手将^レ斬^レ之、源

助幼不^レ識^二人事^一、顧曰頸左有^レ腫、不^レ勝^二其痛^一、請從^レ右刃

焉、參聞^レ之毛髮怒張、泣下數行、乍呼^二宗吾^一曰、稚兒何罪遭^二此

刑^一、郎君死勿^レ忘也、宗吾曰、兒安足^レ惜、惟恨苛政未^二退除^一衆

迫^二凍餓^一、則吾何能^二於地下^一言畢、搶手一喝刺^レ之、觀者莫^レ不^二

惻心^一、宗吾時年四十三、妻三十九、田宅皆為^二堀田氏所^レ収、河

津有^二東光寺^一、宗吾先塋所^レ在、往持某請^二宗吾等屍^一葬^二

之其側^一、宗吾又有^レ女、長曰雪、適^二常陸時村人治郎^一、次曰初、

水野村民藤四之妻罪並弗逮治郎為^二請堀田氏^一、得^二宗吾

故所有山^二二処^一、附^二東光寺^一以修^二冥福^一、時正保二年二月也、既而

堀田氏大令^三封内租稅隸役一如^二寬永法^一、而沙^二汰賊罪吏若

千人^一、或奪^二其職^一或貶^二其秩^一又召^下初訴^二都郎^一者百五十二人^上、

慰諭懇切、使^二其各安堵^一、先^レ是夫人有^レ娠、寢輒夢^二怪異^一、

遂病以卒、侯亦与^二酒井氏^一 石見守忠孚^一
作稻葉石見守争^二事於^レ大

廷^一、乘^レ忿傷^レ之、二氏邑除、世以為^二宗吾作^レ祟也、後慶安四年

大猷公薨、大_ニ赦_二氏_一、亦得_二復本地_一、於_レ是、堀田氏詞_二宗吾_一於

東山_一、配以_二平將門_一、稱曰_二口宮大明神_一云、

謙麥子曰、苛政之虐_レ民、豈唯猛虎云哉、宗吾憤然有_二博_一

虎之力_一、終能使數萬生靈、免于溝壑于今日之久、乃

取_レ禍一時而食祀百載、其亦偉矣、仲尼不_レ云乎、殺_レ身以

成_レ仁、如_二宗吾_一者、庶幾肖_レ之、嗚乎天下之立_レ朝從_レ政者、見_二

堀田氏之風_一、亦可_二以少愧_一焉、頃聞人該宗吾事荒誕不經

無_レ足_二以徵_一、惜其久而漂没不白也次第遺問如_レ此、

田原藩医伊藤_讓頓首再拜謹上_二言於_一

箱館鎮台執事_一

夫赫々廟堂々之儀、如小藩微_臣、固非_下可_二越尊俎_一者_上、雖

然_下國家求_二衆言_一之時_上、知而不_レ言不忠也、言而

不_レ當亦不忠也、且古人有_レ言曰、野言陋語聖賢選_レ之、又

曰、智者千慮有_二一失_一、愚者千慮有_二一得_一、是以如_レ讓也亦自

忘固陋和盤托書不_三敢包_二拙慮_一、獻_二鄙策一篇_一以犯_二嚴威_一、

然不學無術、定知_レ不免_二不當之罪_一、幸不_下以_二狂言_一斥_上、而万_一

垂_二鴻慈_一采_二芻蕘_一獲有蒙

鎮台一覽伝瀆

槐棘之電矚則雖レ死亦不レ朽已矣

伏惟近歲

朝廷務_二鼎革_一而除_二旧制_一敷_二新令_一、政化逮_二四夷_一臻_二遐陬_一、於_レ是建_二

蝦夷壅闢之策_一、執事當_二其選_一任_二其官_一、實裁成輔相之職

也、仄聞、執事之治_二蝦夷_一、先_レ之以_二教化_一、勸_レ之以_二職業_一、且募_二四方

技能之士_一欲_レ使_二之繁_一榮其土_一、於_レ此蝦民欣戴服從何仁如_レ之

歟、窃思、自今而後、五穀可熟、人民可息也、必矣、嘗聞彼蝦

夷之地、自_二開闢_一爾來至_レ今五穀不_レ種、桑麻不_レ植、其民但以_二

漁獵_一為業、易之於

皇國之米以得有其食矣、夫民之為_レ道也、衣食住三者、

實貴_二於金銀珠玉_一、金銀珠玉雖_二或欠_レ之亦可也、此三者生

民之不_レ可_二一日欠_一者也、今夫蝦人地則其所固有而住

焉、穀則從_レ今而可_二得以食_一也、蓋其所_レ闕者独機織之業

耳、雖_レ有_二土產_一而不_レ過_下如_上藤布_一者_一、則未_レ可_レ謂_レ知_二機織之

道_一已矣、仮令方今蝦民一家之人、有_二父母夫妻_一則父者服_二

皇國之絹_一、母者蒙_二山丹之布_一夫_一者、衣_二魯夷之葛_一、妻者着_二

土產之藤布_一、其衣被皆以_二漁獵一業_一所_二貿易_一也、以_二其所_レ有

易_二其所_レ無者_一、固非_二為不可_一也、雖_レ然遠取_二之於他邦_一則有時

乎不免物価騰躍而人民受凍患爾矣、是以機織之道不

27丁

レ可レ不レ為「急務」也、蓋以「天度」論レ之其土五十度内外之地也、歐羅巴州亦五十度以外之地、其度数略相似也、然則如「綿羊類」固可「育」也、庶幾

朝廷買「綿羊四五千匹於外夷」而使「牧夫畜」之、其地當「夏日希革之時」、取「其毼毛」以織「毼氈」而為「蝦民之服」、有「余者則使」貿易於

皇国「而禁」外夷毛織之齋來「則不」畜蝦夷之益、抑

皇国亦其益豈為「尠哉」、且其民人倣「漢土諸戎之俗」而食「

其肉」則亦足「以可」充「貧者之枵腹」矣、又使「植」桑麻「而教」養蚕「

習」續緝「以得」成布帛^中則其人民可「長免」凍患「也、雖」魯夷滿

洲之北地「亦皆有」畜羊養蚕^上、況其中央蝦夷地、豈有「不」成之

理「乎、如」麻桑「則最宜」於北方寒土^三、故出羽米沢所「產特為」

海内殊品^二、其理可「以見」爾、^讓雖淺陋取所說則蝦夷人

民衣食住賴「此而足乎、伏庶幾、

朝廷垂「鴻慈」不「棄」芻蕘^二、采「捫菅蒯」、以有興仁民利邦

之永圖、頓首再拜頓首再拜謹上言、

于時安政三年歲在丙辰二月中旬日

【注】

- 1 村上範致（一八〇八一—一八七二）幼名を喜之助といい、通称は定平、諱は初め貞輻、のちに範致。清谷と号する。のちに家名の財右衛門を襲名する。田原藩の軍備を西洋砲術へ改革する。下級藩士から、家老まで出世した。『田原町史 中巻』（田原町文化財調査会編、田原町教育委員会、一九七五年）一〇七九—一〇八六頁]
- 範致が記した記録に「安政乙卯聞見雜録二」「安政丙辰聞見雜記三」「安政四丁巳聞見雜記四」「安政五戊午聞見雜記五」「安政六己未聞見雜記六」「万延元庚申聞見雜録七」「文久元辛酉聞見雜録八」「慶応四丁卯冬聞見録」が田原市博物館に所蔵されている。村上範致古記録研究会では以上の古記録を総称して「村上範致聞見雜記」といい、翻刻を進めている。
- 2 鵜飼尚代・佐久間永子「村上範致著述古記録に関する基礎研究」（『名古屋外国語大学論集 2号』名古屋外国語大学、二〇一八年）三〇九頁において、八十丁としたが、ここで訂正する。
- 3 『田原町史 中巻』一〇八四頁
- 4 『田原町史 中巻』七一九頁
- 5 沈国威「『遐邇貫珍』解題」（『遐邇貫珍の研究』関西大学東西学術研究所研究叢刊24、関西大学出版部、二〇〇四年）九一頁
- 6 松浦章「『遐邇貫珍』の描く近代東アジア世界」（『遐邇貫珍の研究』）一五頁
- 7 『日本史広辞典』、山川出版社、一九九七年、三九四頁
- 8 安井息軒（一七九一—一八七六）飢肥藩安井朝完の次子。江戸時代後期の儒学者。天保十年江戸に三計塾を開く。弘化四年米国艦の浦賀到来に際して藩に海防意見書を進言する。文久二年幕府より召があり御儒者を命じられる。明治二年新政府の出仕勧誘を辞し彦根藩主へ「貞観政要」講義、飢肥藩世子および門弟教育に力を注いだ。『日本近世人名辞典』、吉川弘文館、二〇〇五年、一〇五九—一〇六〇頁]
- 9 佐倉惣五郎生没年不詳 近世の義民の代表とされる人物。しかし確実な史実は不明である。名は宗吾・惣五などとされるが、当時の名寄帳に惣五郎とある。『日本近世人名辞典』、四一七頁]
- 10 河村望（二〇〇五）は、「佐倉惣五郎物語は、日米修好通商条約の締結の当時、今言えば首相兼外相であった堀田正睦の業績を称えるためのものだった」と指摘している『夜明け——ジョン万次郎と佐倉惣五郎』、『有』人間の科学新社、二〇〇五年、一四九頁]
- 11 『田原町史 中巻』一二二頁に、「安政三年、田原藩土坂倉銀之助長崎にてオランダ人に師事せる西洋流銃陣を藩内に伝講を始める」とある。

12 村上範致古記録研究会において二〇一八年三月から二〇一八年五月に輪読し検討を加えた成果である。研究会メンバーは、左記のとおりである。

秋元悦子、砂川亨、鵜飼尚代、黒川秀雄、佐久間永子、塚原美根子、仁田紀生、早川秋子、林由紀子、原千里、福田花子、堀尾裕真、吉川将。

13 担当者は、鵜飼尚代、黒川秀雄、佐久間永子、塚原美根子、仁田紀生、林由紀子、福田花子（敬称略五十音順）。
鵜飼・佐久間「前掲論文」三〇六頁を参照。